

<b>Title</b>	新渡戸稲造のアメリカ観とクエーカー主義
<b>Author(s)</b>	鵜沼, 裕子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 16(2): 1-10
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=155">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=155</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 新渡戸稲造のアメリカ観とクエーカー主義

鵜沼裕子

Inazo Nitobe and America with Special Emphasis on his Quakerism

Hiroko UNUMA

In Nitobe's view of America and in his way of thinking, a specific attitude of tolerance toward others and other cultures is seen. This paper examines how his Christian faith, which was Quakerism, prepared the way for the mutual toleration which is now thought to be very important in the international relationships of countries.

このたび「聖学院大学論叢」の編集委員から、第16巻第2号のアメリカ研究特集に、新渡戸稲造をテーマに寄稿するようにとのご依頼を受けた。いただいたタイトルは「アメリカにおける新渡戸稲造」というものであったが、それにはアメリカでの新渡戸の足跡・活動を実証的にあとづけねばならない。しかし私の仕事は基本的には実証をこととするものではないので、当該テーマのもとにオリジナルな論文を作成することは、私の守備範囲を越える作業であった。そこで編集委員にお願いして、タイトルを標記のように変え、新渡戸稲造のアメリカ観や対米姿勢を貫くものと、クエーカー主義の信仰とのかかわりについて若干の考察を試みることにより、与えられた責めを果たさせていただくこととした。そのさい、全体の論述のために必要な実証的なことがらについては、多くを先学の研究に負ったことをお断わりしておきたい。

### (1) 新渡戸稲造とアメリカ 滞米経験と関係著作

新渡戸稲造（1862 - 1933）は、東京大学への入学にさいし、面接者の外山正一に入学の目的を聞かれて、「太平洋の橋になりたいと思います」と答えて外山を戸惑わせたことはよく知られている（『帰雁の蘆』、『新渡戸稲造全集』第六巻に収録）が、彼はこの抱負のとおり、日本の先駆的な国際人のひとりとして歴史に名を残すこととなった。いま新渡戸稲造の全生涯を視野に入れて考えるなら、「太平洋の橋」の彼方に控えていたものは欧米全体であったということになるであろうが、新渡戸が最初に体験した外国であり、かつ彼の生涯と人間形成に最も深くかかわったのはアメリカで

---

Key words; NITOBE, Inazo America Christianity in Japan Quakerism Toleration

あった。彼のアメリカ留学について、一研究者は次のように述べている。

「欧米留学時代の新渡戸にとって前半三年間のアメリカ生活は、私費留学による経済問題、メリー・エルキントンとの出会いと、双方周囲の反対を押し切った結婚への道程、クエーカー入信そして、明治時代を通じての国民的課題でもあった一連の不平等条約改正運動 - そのためアメリカ各地へ情熱的に出向いた講演旅行等、同時代の明治期青年知識人として、たいへんな苦難と活力に満ちた意義ある三年間であった。それだけに、官費留学生として恵まれた学究生活を送れた後半三か年のドイツ留学とは、比較にならない鮮烈な人生体験をもてた時期であり、後半の国際人・教育家・新渡戸稲造を形成する重要な節目の時代であったといえる。」(『新渡戸稲造全集』第十七巻・620頁、以下全十七・620と略記する。)

まず新渡戸の生涯から、アメリカとのかかわりの主なものを簡単に押さえておきたい。

1884(明治17)年9月、新渡戸稲造は横浜を帆船でアメリカ留学の途についた。洋行の動機は、消極的には、期待をもって入学した東京大学の内容に失望したことにあつたが、それとともに、欧米に比べて日本の学界が著しく遅れていることに気づき、「苟しくも学に志す以上は(中略)、第一に己を磨かざるべからず、それには広い世界に出なければ唯々遅れるのみと思ひ定めた」(『帰雁の蘆』、全六・21) ことにあつたという。

アメリカでは、ペンシルヴァニア州ボルチモア市のジョンズ・ホプキンス大学に3年間在学し、経済学、行政、国際法、歴史学、英文学、ドイツ語などを学んだ。また、このボルチモア滞在中にクエーカー主義のキリスト教と出会い、その信仰に立つようになったこと、またクエーカーの集會が機縁となって生涯の伴侶となるメリー・エルキントンと出会ったことは周知のとおりであるが、それらの伝記的な詳細にはここでは立ち入らない。

アメリカでの勉学の後、1887(明治20)年から3年間、今度は官費留学生としてドイツのボン、ベルリン、ハレの諸大学で農政学等の研究に従事し、91(明治24)年に帰国した。

その後の新渡戸の渡米は、ややまとまった期間にわたるもののみを記せば次のとおりである。

1898(明治31)年、37歳のとき、病氣療養のために渡米し、妻とともに1900年まで気候温暖の地カリフォルニア州の南部に滞在した。主著となる『武士道』(“Bushido, The Soul of Japan”)はこの渡米中に執筆され、渡米2年目の1899年にアメリカで出版された。次に1911(明治44)年から翌年にかけて、第一回日米交換教授として渡米、ジョンズ・ホプキンス、コロンビア他の6大学で、166回にわたり日本紹介を主とする講演を行った。この時の講演は、『日本国民 - その国土、民衆、生活』(“The Japanese Nation, its Land, its People, its Life”)として、1912年にアメリカで出版された。1932(昭和7)年、アメリカの対日感情が次第に悪化し、国内でも右翼の言動が激化する中で日米関係の改善を目指して渡米、大統領や国務相を初めとする要人と会談し、また1か月にわたってア

アメリカ各地で講演して、排日移民法の撤回を求めたり、国際問題をめぐる両国間の意見対立の緩和に努めたりした。太平洋問題調査会の団長としてカナダのバンフに向けて出帆し、かの地で病を得て終焉を迎えたのは、その翌年の1933年10月であった。

次にアメリカ関係の著作であるが、文書として残された新渡戸稲造の仕事は、主著『武士道』のような独自の思索の産物を頂点として、諸大学における講義をもとにした学術的著作、それに広く一般庶民に向けて修養と良識を説いた平易な文章の3種に大別できる。このうち第二のカテゴリーに属する仕事は、専門の植民地政策学等に関するものを除けば、日本文化の海外への紹介、日米関係ならびにアメリカの歴史や文化の日本への紹介がその重要部分を占めている。

いま米国に直接にかかわる著作の中の主なものをあげれば、まず『日米関係史』(原英文)は、アメリカ留学中に作成され、ドイツ留学から帰国した1891(明治24)年に出版された。本書はこの分野での新渡戸の最初の著作であるばかりでなく、「おそらく日米関係について、日本人の手になる最初の学術的業績といってよいであろう」といわれている(全十七・164、松下菊人の解説より)。

アメリカに関するもうひとつのまとまった著作『米國建國史要』は、著書自身の「はしがき」および全集第三巻の解題と解説によれば、東京大学法学部のヘボン講座の開講にさいして行われた特別講義をもとに、1919(大正8)年に刊行されたものである。ヘボン講座とは、アメリカの銀行家A.B.ヘボン(最初に来日したプロテスタント宣教師の一人J.C.ヘボンの遠縁にあたる)が、日米両国の友好を深める目的で渋沢栄一を通して東大に寄付した講座で、美濃部達吉の「憲法」、吉野作造の「外交」と並んで新渡戸稲造が「歴史」を担当することとなったという。同解説は、これら一連の特別講義は、「日本におけるアメリカ研究にとって、劃期的な企画であり、日本におけるアメリカ研究がその第一歩を踏み出す門出であったといっても、必ずしも云いすぎではないであろう」と記している。

米国にかかわる著作としてはこのほかに、『日米交渉史』、『ウィリアム・ペン伝』、『建國美談』(いずれも1891年刊行)などがあり、斉藤真は新渡戸稲造を、「当時(明治中～後期)の日本におけるアメリカについての第一人者であったといえる」(全三・671)と評している。

## (2) アメリカ関係の著作にみる発想の特色

丸山真男は「ヨーロッパと日本とのもつともすぐれた文化的架橋者となった」人物として福沢諭吉・岡倉天心・内村鑑三の3人を挙げ、「彼等の生き方なり思想なりには、日本帝国の正統的なパターンからどうしてもはみ出さざるをえないあるものがつきまとっており、まさにそれが三人の思想家としての生命力の源泉をなしていたのである」(「福沢・岡倉・内村 西欧化と知識人」<sup>(1)</sup>、傍点原著者)と述べている。新渡戸稲造もまた彼らとほぼ同時代の「ヨーロッパ(アメリカ)と日本とのすぐれた文化的架橋者」であり、かつ内村や岡倉と同様、「練達した英語で「日本人」と「日本文

明」を西欧に伝え」(前掲論文)た人物であった。特に内村とは青年時代から生涯にわたる畏友同士であり、同じくキリスト教信仰という共通基盤に立って「日本」を英文で海外に知らしめた。

しかしながら、新渡戸稲造の生涯と思想が醸し出す雰囲気は、丸山が描いた三者のそれとはある意味で全く対照的である。同じく「開国」を体験したにもかかわらず、新渡戸には丸山の言うような「パセティックな渴望」はなく、「正統的なパターン」から「はみ出し」(前掲論文)た視点から日本を見るアウトサイダー的な姿勢も存在しなかった。彼の世界は常に独特な静謐さと、暖かではあるが“醒めた”とも言えるユーモアに満ちている。それはひとつには、新渡戸の公的生活の場そのものが彼らと異なるものであったことにもよるであろうが、ここではまず、彼らのそれとは異質な新渡戸の発想そのものに注目してみたい。

ある論考の冒頭で新渡戸は、「(自分は)これを学術的の問題として研究するのではなく、一つの生きた思想問題として取扱ひたい、と思ふのである」(下線筆者)と断っているが(全六・187)、これは同論考だけでなく彼のアメリカ研究をも(恐らくは学術的な全業績をも)貫く姿勢であったと言えるのではなからうか。そもそもアメリカに対する新渡戸の学術的関心の由来は、ひとつには、将来の国際世界におけるアメリカおよび日米関係の重要性を予想したことにあつたと思われる。従って彼が考究の対象としたのは、アメリカの思想よりもむしろ主として現実としての「アメリカ」であり、彼の言う「生きた思想問題」とは、アメリカ研究について言えば、公人として生涯にわたり望ましい日米関係の構築に尽瘁した新渡戸が、アメリカおよび日米関係の歴史の現実の中に、こうした課題への生きた教訓・道標を見いだそうとした試みであつた。いまこうした視点から、前述のアメリカに関する諸著作を眺めてみたい。

まず『日米関係史』は、はじめに触れたように「おそらく日米関係についての、日本人の手になる最初の学術的業績」と言われており、かつ「その英文は新渡戸独特の気品と力強さの溢れる達意の名文」と評されている(全十七・614)。新渡戸の自序と全集の解説によれば、本書は新渡戸がジョンズ・ホプキンス大学に留学中、指導教授ハーバード・B・アダムズのすすめによって博士論文として作成された。しかし、その後ドイツに旅立つまでに完成させることができず、本論文による博士号の取得は成らなかつたが、ドイツ留学を終えて帰国する年にアメリカで出版された。

内容は、ペリーによる開国交渉開始以前の、日本の諸外国とのかわりを略述することに始まり、日米和親条約、日米修好通商条約の締結までの経緯、そして近代日本社会の諸相におけるアメリカの影響の紹介、それらに対する感想・コメント等から成っている。執筆意図について自序に、「日本に対する国家としての米国の態度、及び数人のアメリカ人の個人的に私に対する態度に対して感じる深い感謝の念にもとづくものである。もし、この小著が国民的友情の絆を強めるうえに、少しでも貢献し、かつ両国において、いく人かの人々の心を近づけるのに役立つならば、私が小著をかくのに費やした時間は十二分に報われる思いがする」とあるように、本書は純粋な学術書というよりは、先行研究や個人的な見聞によりながら日本をアメリカに知らしめ、それによって両国間の絆

を深めようという「実利的な」動機にもとづく著作であった。ペリーやハリスの主導によって平和的な開国が実現し、日米両国の友好的な関係の基礎が築かれたことが強調されているあたりに、こうした新渡戸の意図を垣間見ることができよう。アメリカのキリスト教や宣教師の伝道方法に対する忌憚のない見解も随所に散見するが、ほぼ同時に同じく英文で書かれた内村鑑三の、『余は如何にして基督信徒となりし乎』の齒に衣着せぬ筆鋒と比較するとき、後の「国際人・新渡戸稲造」のふところの深い、良い意味でのプラグマティックな対外的基本姿勢は、すでにその萌芽を見せていると言うことができよう。

『米国建国史要』（1819）は、斎藤真が「建国史といっても、むしろ植民地建設の歴史が大部分を占め、当時植民政策講座を担当していた新渡戸の比較植民政策論の関心がかかなり強く表現されて」（全三・671）いる、と記しているように、アメリカの植民時代を、世界の植民事業の一環として考察したものであるが、歴史に「生きた思想問題」への道標を探るという「実用的」な意図が一層直截に込められた著作である。すなわち本書の執筆意図は、新渡戸自身が「研究の目標」として述べているように、諸国家のアメリカへの植民の経緯と方法をあとづけ、アメリカの発見や開発に先鞭をつけた大国が後退して後続の英国が拓殖事業に成功して今日のアメリカの基礎を据えた理由を明かすことにあった。そして、「此問題を究めて行けば、現今も如何なる国が如何なる方法で海外に発展するであろうかに就いて「ヒント」を得る事が有らう」と述べられている。さらに、「此問題を窺ひ得たなら吾人は我国が既に有する若しくは将来或は有するに至るべき植民地に対して当に採るべき態度を決定する策を所在<sup>ママ</sup>に発見するであろう」と結ばれている。（昨年、新渡戸の植民地論をめぐって彼の「帝国日本」への姿勢に対する批判的論議があるが、このことに立ち入るのは本論の主題の範囲ではない。）

このように、新渡戸にとってアメリカ問題は、日米の友好的関係の構築や自身の植民地政策論にとっての「生きた思想問題」としての意味をもつものであった。その意味で、彼のアメリカ研究の基本姿勢もまた、すぐれたプラグマティックな発想にもとづくものであったということができよう。

さて『建国美談 - ウヰリアム・ペン小伝』（1895）と『ウヰリアム・ペン伝』（1894）の2著（『全集』第三巻に収録）もまた、新渡戸にとっての「生きた思想問題」を扱った作品である。すなわち、前2著が国際政治舞台での「生きた思想問題」にかかわるものであったとすれば、これらは、彼の信仰と生き方、あるいは新渡戸のもうひとつの本領である「修養」という課題にかかわる「生きた思想問題」であり、それに教訓・道標を提供するものであった。

ウヰリアム・ペン（1644 - 1718）は英国のクエーカー教徒で、アメリカに植民地ペンシルヴァニアの基礎を築いた人物である。彼は1682年、当時母国で「非国教徒」として扱われていたクエーカー教徒を率いて「良心の自由」の実現を新天地アメリカに求め、ペンシルヴァニアに植民地を建設した。前述のようにペンシルヴァニアは新渡戸にとって、クエーカー主義の信仰を得た地であり、生涯の伴侶メリー・エルキントンとの出会いの地でもあった。同地と新渡戸のこうした関係を思い起

こすなら、新渡戸のペンへの思い入れの深さ、そして、ペンについて併せて相当の量となる2著を著した心情は推察するに難くない。

2著のうちの前者は、フィラデルフィアの「ロバーツ婦人」なる人物が「家庭教訓ノ資ト為セント欲シ」で著した原著を新渡戸が訳出したもので、W. ペンの生涯と彼による植民地建設の経緯を述べたものである。この「平素欽慕措ク能ハサルノ偉人傑士」の伝記を一読して、「千里ノ遠友」、「隔世ノ英雄」に接したという感慨を抱いた新渡戸は（「緒言」、全三・109）、ペンのクエーカー信仰にもとづく事跡を同胞に知らしめたいとの思いから本書訳出の労を取ったものと思われる。

後者は新渡戸自身の手になる W. ペンの伝記で、前者よりもはるかに大部のものである。本書の重点は、植民地建設の経緯よりもペン自身の生涯と思想の詳細な紹介に置かれており、彼の生い立ちからクエーカー主義への改宗、信教の自由獲得のための戦い、北米への移住と植民地ペンシルヴァニアの設立、さらにペン自身の著作の紹介をも含んでいる。少年時代、フレンド派の伝道者トーマス・ローの説教を聞いて感動しクエーカー主義の信仰に転じた W. ペンが、信教のゆえに国教会のもとで圧迫され、ときにロンドン塔に幽閉されるという苦難に遭いながらも、ついにフレンド派の誠実を時の国王に信任させるにいたり、ペンシルヴァニアに領地を得て、同州独立の基礎を据えたという W. ペンの一代記は、まさに新渡戸にとって信仰にもとづく生涯の生きた手本であった。人生の道標・教訓は新渡戸にとって、抽象的な理念や知的思弁を弄した言語の中ではなく、生きた現実の中にこそ見いだされるべきものであったのである。

翻訳ではあるが前著の次のような結びの言葉は、多少のけれん味を感じさせなくはないが、これらの2著が新渡戸の数多い平明な人生修養書と同質のものであり、すぐれた意味で「実用的」な、人生と信仰の手引書を意図したものであることを窺わせるに足るであろう。

「更に仰で空を眺むれば優然として笑を含みつゝ子孫の繁栄を見下し居れる一大銅像の精神たるウィリアム・ペンまことのこころ至誠実意の結果実に大なるものところそは云ふ可きなれ。」（全三・229）

### (3) 多様性の共存とクエーカー主義の信仰

さてこれらアメリカ関係の諸著作からも窺えるように、新渡戸稲造の世界は、まさに硬直した原理主義的な思考態度の対極にある状況即応的な柔軟さ、恒に具体的な事象に即してものごとを見る現実重視の姿勢を本領とするものであった。しかし言うまでもなくキリスト者である新渡戸の世界は、普遍的な理念や確固とした信念を欠く、単なる日和見的な相対主義とは無縁のものであった。

青年時代からアメリカに学び、終生、望ましい日米関係の構築につとめた新渡戸であったが、「アメリカ的なもの」の影響については、特に倫理道徳面に関しては、基本的にはむしろ批判的であった。日本にもたらされたアメリカ的なものの中で特に新渡戸の心になじまなかったものは、ひとつ

にはその「個人主義」とそれに結びついた功利主義であった。『日米関係史』の第四章「日本におけるアメリカ人およびアメリカの影響」(全十七・463~526)の中で新渡戸は、アメリカがもたらした「暗い側面」として次のようなことを述べている。

封建制度のもと、「孤立した平和」に安住していた日本に、突如として新しい酒が注ぎ込まれて「古い皮袋」を破裂させた。その酒のひとつは「個人の自由」という思想であった。自由と平等の観念と密接に結びついている「個人主義の原則」は、確かに西洋のみが専有する道德上の「高尚な資質」ではあるが、そこにはまた「暗い面」も潜んでいる。それは、「アメリカ人の自由・平等思想の影響」が、「礼」に支えられたわが国古来の社会の絆を破壊したことである。確かにアメリカはわれわれにキリスト教を初めとして物質文明以上のものを教えたが、総じて欧米的な「損得の哲学」が、「古代の東洋哲人たちのもっとも自然で美しい教え」、「単純だが崇高な訓言」にとって代わりつつある。

新渡戸が継承を希求した、「自然で美しい」、「単純だが崇高な」倫理の内容については、主著『武士道』にあますところなく示されているが、『日米関係史』に関して言えば、ここで彼がアメリカ的な「個人主義」との対比で失われ行くことを歎いている日本の伝統とは、封建制度のもとで醸成された、忠誠心を初めとする諸徳を絆として結ばれた共同社会であったと思われる。彼は言う、「封建制度は政治制度としては失敗したとしても、社会制度としては多くの貴い道德的特徴をこれまで発展させたのであった。今日の個人主義的な社会組織が、日々の人間関係を現金の貸し借りで成り立たせているのとは違って、封建制度は、人々を仲間同志の間の個人的絆で結びつけたのだ」と(全十七・521)、と。

こうした新渡戸のアメリカ観や封建制度観の当否を論断することは本稿の課題ではない。ここでははいま少し「共同社会」と「個人主義」とをめぐる彼の言葉に聴き、それを手がかりに新渡戸の思考態度の特色に近づいてみることにしたい。

前述の『日本文化の講義』(没年の前年にカリフォルニア大学で行われた講義の草稿をもとに、没後メリー夫人によって刊行された)の第十七章「日本と米国」(全十九・310~327)の中で新渡戸は、両国の相違点のひとつとして、アメリカが「個人主義的」であるのに対し、日本は「コミュニスティック(共同体主義的)」であることを挙げている。そしてそれに続けて次のように述べている。

「皆さん(アメリカ人、ここではカリフォルニア大学における講演の聴衆)は個人主義的であることから、自らの利益を守ることに力を入れて、自分の権利を主張するのである。共同体主義的なわれわれは、自らの利益を他人のそれに融合させ、義務の方にもっと重きをおくのである。したがって、自由競争を、皆さんは行動の原則としてきた。貧しいものは、敗北しても仕方がない なぜなら、それが皆さんの“神”の思し召しだからである。われわれ



にとつての教訓は、ある一家の関係者により貧しいメンバーがいたり親戚がいたりすれば、その家族全員が協力して、その人たちの面倒をみるということであった。」

さらに続けて、「個人主義」と結びついた「平等」について次のように述べる。

「皆さん方は、その政治生活を「すべての人は平等に創られている」...という原則で始めた。しかし、ある面で、これほどまでに、人々が不平等に生活している国は他にはない。神（創造主）は、人間を平等に創られたが、金銭が人々を不平等にしてしまった。われわれは、人間は不平等に創られているという考えで政治を始めているが、地位財産による差別を許さぬわが国の学校制度を通して、人々は、平等に近づきつつある。」

このように新渡戸は、日本的な「共同体主義」のもつ美点を語るのに、アメリカ的な「個人主義」に対する忌憚のない批評をもってする。これらの文は、1924（大正13）年に「排日移民法」を成立させたアメリカに対して「日本」を弁明することを目指したものであることを考慮に入れるとしても、新渡戸が総じて欧米的な個人主義や功利主義を体質的に好まなかったことを窺わせるものであろう。

常に異なる立場への寛容をめざした新渡戸であったが、時にはこのように、ものごとの是非に対する見解を忌憚なく表明することに吝かではなかった。ことに、アメリカのある種の慣習や風俗の日本への導入に対しては、「毒麦の移入」であるとまで手厳しく決めつけている。しかしながら新渡戸は決して、ある固定的な価値基準をもって毒麦を篩にかけようとしたのではなかった。また、「毒麦」と「小麦」を選別して良質なものを学び取ることも、新渡戸の真意ではなかったようである。では新渡戸が、敢えてアメリカの「暗い面」に触れてまで自他の相違を明らかにしようとしたゆえんは何であったのか。

前記の『日本文化の講義』の第十七章「日本と米国」は次のように書き出されている。

「異なった国民には異なった特徴があるのは、否定できない。その背景説明は、心理学者と生物学者に任せることにしよう。基本的には、人類は精神において一つであり、この基本に向かってわれわれは近づいている。一方、われわれは、相互の相違点を理解し、調整するよう努めねばならない。そして、そのためには、相違点の実体は何かを良く理解し、できれば、その実体を正確に知ることは、われわれの義務である。そのことなしには、この世界は、より貧しいものとなる。変化は、人間の生活を豊かにする。したがって、われわれは、国民性における多様性をむしろ歓迎すべきである。」（全十九・311）

繰り返し言えば、この文のもととなった講演は、「排日移民法」の実施という時代背景の中で日米関係の改善をめざして行われたものであり、本文章は、日本の国民性の美点をアメリカに認知させようとして書かれたものであることを考慮して読まれねばならない。ただここでさしあたり確認しておきたいことは、ここに込められた新渡戸の意図が、「共同体主義」と「個人主義」の是非を論じ、日米はそのいずれかに同化されるべきだと主張することにはではなく、自他の特色と相違点を見極めて、それぞれの個性を尊重しつつ共存すべきことを訴えることにあった、ということである。そして、こうした彼の思考態度は、アメリカに限らずあらゆる国や他文化にかかわる時の新渡戸の基本姿勢でもあったと言って誤りではないであろう。個性や見解の異なる者同士、すなわち多様性の共存をめざすという姿勢は、単にアメリカという一国を相手にする場合に限らず、立場や主義主張を異にする全ての他者に対する新渡戸の基本姿勢でもあった。そこで最後に、こうした新渡戸の世界の根底にあって、彼の思考態度と生き方とを支えたクエーカー主義の信仰に触れて、本稿の結びとしたい。

周知のようにクエーカー主義の特色は、すべての人間に神から照射される「内なる光」を信じ、これを信仰の原点として受け入れることにある。各自の心に直接に働く「内なる光」は、キリストによる救いを可能とする霊的な働きであり、教会的伝統や聖書にさえも優先して信仰成立の根拠とされる。

新渡戸は、神的なものとその光を受ける人との関係のありようを、しばしば愛吟の古歌に託して月とこれを映す池の水面にたとえた。そこでは、光源である月はひとつであってもその映り方はさまざまである。「神の力が人の心に働き、更らに之れが外部に顕はるるに至る有様は、人々の個性によって異ならねばならぬ筈である。各人同一の神にそのところが照らさるるなれども、其の光が身の外に顕はるる時は、各々光の色が違って見える」(全十・18)。

これは直接にはキリスト者のあり方について言われた言葉であるが、新渡戸においてこの理解は、時にキリスト教の枠をも越えていく。本来のクエーカー主義においては、「内なる光」の“光源”は、言うまでもなく聖書の啓示する神にある。しかし新渡戸にとって「内なる光」の“光源”は、キリスト教の枠をも越えてあらゆる宗教や道徳的信念に通底する神的な“なにものか”であった。敢えて言えばそれは、生来、神秘家的な資質を備えていた新渡戸の宗教的な感性が、絶えずその存在を暗示し続けた、神秘の他界から射してくる光であったとみられるのである。従って新渡戸にとってその光は、単にキリスト教のみの専有物ではなかった。その光のもとで世界のあらゆる宗教や道徳的信念は、キリスト教と並んで人々を精神のより高い境地へと導くのである。<sup>(2)</sup>

「基本的には、人類は精神において一つ」であり、「この基本に向かってわれわれは近づいている」(全十九・311)。心の深奥において全人類の精神はひとつであり、世界はその理想に至る階段を登りつつある。しかし現実の世界はさまざまな価値観や立場のせめぎあいの中にある。そうした中で、国際舞台での新渡戸の多難な活動を支え、その活力源となったものは、立場や価値観を越えて全て

の人の心に照射される「光」の存在への確信であった。

こうした信仰からは、自己の見解への独善的な固執や、他者の立場への一方的な断罪は生まれにくいであろう。ここには立場や信念を異にするものへの独特な寛容がある。多様性の共存という目標を新渡戸の心の深奥において支えたものは、このような新渡戸独自に彩色されたクエーカー主義の信仰であったと考える。時に「アメリカ」に対してかなり批判的であった新渡戸であるが、彼がアメリカで出会い受容したクエーカー主義の信仰が、彼の生来の寛大さおよび国際人としての良識とあい働いて、他者に対する好ましい姿勢を整えたことを確認して小論の結びとしたい。

## 付 記

「アメリカ」をキーワードとして新渡戸の世界を考察することは、私にとってはじめに予想したよりもはるかに困難な作業であった。そして本論は、結果的には新渡戸のアメリカ観そのものを考察するというよりも、彼のアメリカ観を手がかりに新渡戸の世界のありようの一端を整理したものとなってしまった。大方の、特に本特集の企画を担当された方々のご海容を乞いたいと思う。

## 注

- (1) 丸山真男『丸山真男集 第七巻』所収・岩波書店、1996、p.347-368
- (2) この辺の消息については、拙著『近代日本のキリスト教思想家たち』（聖学院大学出版会、2000年3月）の第四章「新渡戸稲造の信仰 その神秘主義的宗教観をめぐって」にやや詳しく述べた。

## 参考文献

- 松隅俊子・『新渡戸稲造』・みすず書房、1981  
佐藤全弘・『新渡戸稲造 - 生涯と思想』・キリスト教図書出版社、1984  
佐藤全弘・『新渡戸稲造の信仰と理想』・教文館、1985  
佐藤全弘・『現代に生きる新渡戸稲造』・教文館、1988  
佐藤全弘・『新渡戸稲造の世界 人と思想と働き』・教文館、1998